

放課後児童クラブ利用者における「小1の壁」とは何か —岩手県大船渡市・北上市・滝沢市の小1保護者の調査から—

庄司 知恵子¹・渡部 芳栄²

The "First Grade Barrier" for After-School Childcare Users: A Survey of Elementary First-Graders' parents from Three Cities in Iwate Prefecture

SHOJI Chieko, WATANABE Yoshiei

本稿は、公益財団法人いきいき岩手支援財団の企画のもと、2020年度に「子育てと仕事の両立についての調査」で得られた自由記述をもとに学童保育利用者における「小1の壁」について検討したものである。結果、宿題等のチェック、行事への対応、弁当の対応、登校、学童開所・閉所時間、新しい生活への対応、学童保育の体制の6点が「小1の壁」としてあげられる。共働き世帯において、小学校入学時に課題としてあらわれる子の放課後の居場所を確保するために設けられた学童保育が、利用者の「小1の壁」の原因となっている点が確認された。このような状況を解決するためには、学童保育の在り方、行政による支援についての検討が求められる。

キーワード: 小1の壁、ワーク・ライフ・バランス、放課後児童クラブ

This paper reanalyzes the results of the report "Survey on Balancing Parenting and Work" (planned by Iki Iki Iwate Support Foundation). This survey was conducted on caregivers of children entering elementary school in 2020 and who use after-school childcare facilities in Ofunato City, Kitakami City, and Takizawa City. This paper examines the "first grade barrier" among Surveyed persons based on the free descriptions obtained from the "Survey on Balancing Childcare and Work" in fiscal 2020. As a result, six points were raised: checking homework, etc., dealing with events, dealing with lunch boxes, going to school, opening and closing hours of school-age children, dealing with new life, and after school childcare system. It was confirmed that the school-age childcare program, which was established to solve the problem of where children can go after school, which appears as an issue when children enter elementary school in dual-earner households, has become the cause of the "first grade barrier" for users of school-age childcare. In order to resolve this situation, it is necessary to examine the nature of school-age childcare and the support provided by the government.

Keywords: first grade barrier, balancing parenting and work, after-school childcare facilities

1. はじめに

筆者らは、公益財団法人いきいき岩手支援財団の企画のもと、2020年度に「子育てと仕事の両立についての調査」を行った。調査では、岩手県大船渡市、北上市、滝沢市（以下、それぞれ「大船渡」「北上」「滝沢」と記載する）において、2020年度に子どもが小学校に入学し、放課後児童クラブ（以下、「学童保育」）を利

用している保護者を対象に、アンケート調査を行った。調査対象は、いわゆる「小1の壁」を経験している保護者である。本稿では、調査から得られた「小1の壁」についての自由記述を読み解くことで、学童保育利用者における「小1の壁」とは何かを明らかにする。本調査の対象者は、客観的に見れば、子が小学校に入学する際に、仕事を辞めずに現在に至っている保護者で

¹岩手県立大学 社会福祉学部 ²岩手県立大学 高等教育推進センター

ある¹。つまり、離職という形で「小1の壁」に対処する必要のなかった世帯ともいえる。そのように考えたときに、仕事を継続している保護者たちにとって「小1の壁」とは何かを捉えることは、ワーク・ライフ・バランスを考えるうえで、重要な示唆を提供できると考える。

尚、本報告のもととなる「子育てと仕事の両立についての調査」は、報告書としてまとめられており、いきいき岩手支援財団のホームページ上で閲覧できる。また、報告書をもとに、量的側面については再分析を行っており、研究ノートとしてまとめている（庄司・渡部, 2022）。この研究ノート（庄司・渡部, 2022）が、「子育てと仕事の両立について」の量的な側面の再分析をしているのに対して、本稿は、ワーク・ライフ・バランスを捉えるうえで重要な点である「小1の壁」について、質的側面を捉えることを目的としている。必要に応じて報告書および研究ノート（庄司・渡部, 2022）を参照していただきたい²。

II. 問題の所在

国は、「少子化」「子育て家庭の孤立化」「待機児童問題」などの課題に対応するため、2012年に「子ども・子育て関連3法」を成立させた。2015年からの本格施行に伴い、保育の質と量を担保する観点から、未就学児には「子育て安心プラン」（2018～20年度、2021年度からは4年間は、「新・子育て安心プラン」）、就学児に対しては「放課後子ども総合プラン」（2015～18年度）、「新・放課後子ども総合プラン」（2019年度から5年間）により、保育所等・放課後児童クラブ等の拡充を進めてきた。その結果、未就学児に関しては、2020年4月1日時点での保育所等の待機児童数は12,439人となっており、前年度と比較して、4,333人の減少となった（利用者数は274万人）。この数値は、待機児童数調査開始以来、最少の結果となっている。また、就学児を対象とした放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の待機児童数は15,995人であり、前年に比べて2,266人減となった（利用者は131万人）（厚生労働省, 2020）。

このように数字の上では、子育てをしながら働く保護者にとって、子の預け先は確保されつつあり、子育てと仕事を両立させるための支援は進んでいるように見える。しかしながら、内閣府・仕事と生活の調和推進室が、2020年にまとめた『仕事と生活の調和レポート2019』では、「個人のワーク・ライフ・バランスの希

望と実際の一致状況を整理すると、男女問わず仕事を優先することによって希望を実現できていない状況や、女性に家事・育児等の負担が偏っている、ライフイベントを機に離職を選択している状況があることが明らかにになった」としている。

共働き世帯数は年々上昇し、2019年には1,245万世帯となった（令和2年度版厚生労働白書より）。しかし、先の内閣府の調査からは、ライフイベントによって増える負担に対応するのは女性であるという点があきらかになっており、この点を考えると、どのような働き方の女性が、どのようなタイミングで、離職するのかといったことを知る必要があるだろう。この点に関して、興味深い調査がある。高久は『国民生活基礎調査』を用いて放課後保育が女性の労働供給へ与える影響について推定を行った。その結果、「長子が小学1年生に入学することにより母親の就労率はおおむね10%低下した」とし、「短期間雇用及び常勤雇用の就労者の減少が確認された一方で、自営業の労働者について減少傾向は観察されなかった」としている（高久, 2019:76）。これは、いわゆる雇用労働者における「小1の壁」の存在を示したものである。

「小1の壁」とは、共働き家庭において子どもが保育園を卒園し小学校に入学する際に直面する社会的な問題（坂木, 2015:37）を指す。筆者（庄司）個人の経験で大変恐縮だが、子育てに関する問題は「のど元過ぎれば熱さ忘れる」といった状況と、次々と新たな問題が湧いてきて、過去の出来事は次の問題対応に時間がとられている過程で、「何が問題であったのか」を忘れてしまう。本調査においても「考える余裕がなく何があったかわからない」（北上、母親、30-35歳未満、子2人）という記述があり、記述がない人たちのなかにも、「大変な状況にあった」ということは記憶にあっても、言語化できずにいる人も多いのではないだろうか。「小1の壁」の存在については、指摘されてかなりの時間が経過したと思われるが、まとまった形の研究は多くない。Cinii-Articlesにおいて、「小1の壁」で検索をしても、わずか11件のヒットである（2021年12月14日現在）。もちろん、「小1の壁」というワードではなく、他のワードで検索をすれば、同様の調査が出てくる可能性があるであろうが、それにしても少ない。こういった状況を考えるに、多くの当事者に、様々な角度で、「小学校入学時にどのようなことに困ったのか」という点を問うことで、「小1の壁」とは何で

あるのかが明らかになる。本稿はその一助となることを目的としている。本調査の対象者は、調査年度に「小1の壁」を経験しており、上記課題を検討するうえで非常に適した対象者である。

Ⅲ. 調査概要

先に述べたように、筆者らは、2020年度に「子育てと仕事の両立についての調査」(アンケート調査)を行い、報告書としてまとめた。本稿では、報告書をもとに、先に示した目的のもと、再分析を行う。

調査の企画は公益財団法人いきいき岩手支援財団が行い、調査の設計、実施、および分析は、筆者の一人である庄司が座長を務めるいわて未来づくり機構子育て支援作業部会で検討をした。調査の実施・分析・報告書の執筆を筆者らが担当した。本調査の目的は、学童保育を利用している小学1年生の保護者を対象とし、子育て中の保護者における、子育てと仕事の両立の状況と課題について検討することである。調査対象は、大船渡、北上、滝沢において、2020年度に小学校に入学し、放課後児童クラブ(以下、「学童保育」)を利用している児童がいる保護者であり、回答については、「普段、児童の世話を中心的に行っている保護者1名」をお願いした。調査票の配布は、各市の担当部署(大船渡:大船渡市生活福祉部子ども課、北上:北上市教育委員会教育部子育て支援課、滝沢:滝沢市健康福祉部児童福祉課)を通して、学童保育に配布してもらい、そこから保護者への配布を行った。回答は自記式で行い、回収は、学童保育を通さず、同封した返信用封筒にて、回答者から郵送してもらった。調査時期は2020年11月である。

調査対象地の概要は、以下となっている。大船渡は人口34,738人、高齢化率37.9%であり、沿岸部に位置し、東日本大震災において大きな被害のあった地域である。北上は人口92,292人、高齢化率27.8%であり、地の利もよく、工場が集積している地域である。滝沢は人口55,938人、高齢化率25.3%であり、岩手県の県庁所在地である盛岡市のベッドタウンとして人口が増えている(数値は「令和2年(2020年)岩手県人口移動報告年報」(令和2年10月1日時点の数値)より)。尚、どの市にも児童館、児童センターはない。

各市担当部署から各学童保育に配布した調査票の数は、大船渡107票、北上386票、滝沢269票となっている。この数を分母とした場合の回収率は、全体で

59.7%(455票)、大船渡58.9%(63票)、北上66.3%(256票)、滝沢50.6%(136票)となっている。ただし、各学童保育に調査票配布後の残部については把握していない。そのため、実際の配票数にずれがある可能性も否定できないが、全体の傾向を捉える際に、大きな違いはないものとして分析を進めていく。尚、倫理的配慮として、回答は任意であることを調査票に記し、回答用紙の返信は、学童保育を通さず、回答者が郵送する形をとった。回答結果からは、回答者の居住自治体は特定できるが、どの学童保育に通っているかは特定できない。

「小1の壁」については、問36において、『「小1の壁」とは、『主に、共働き家庭において、子どもを保育園から小学校に上げる際、直面する社会的な問題』のことを言います。幼稚園・保育園から、対象児が小学校に上がり、あなたが経験し、困ったこと、悩んだことがありましたら、教えてください。どんな些細な事でも構いません』と尋ねている。

問36に対する回答の記述件数は、全体455票中231件(50.8%)であり、自治体ごとで見ると、大船渡63票中30件(47.6%)、北上256票中121件(47.3%)、滝沢136票中80件(58.8%)となっている。他自治体に比べ、滝沢において記述割合が高い。尚、「特になし」は、前もって削除をしている。分析に際しては、KHcorder3にて、頻出語句を確認し、その後、Excel上に落とした記述内において頻出語句の検索をかけ、前後の文脈の内容からカウントし、記述内容を検討している。

Ⅳ. 「小1の壁」とは何か—記述内容より

1. 宿題等のチェック

子が小学校に入ることによって親に求められる作業として、宿題や音読のチェック、手紙や提出物の確認、学校に持っていくものの確認がある。記述では、特に「宿題」のチェックについて困難を述べる人が多く、36ケースあった。

「宿題、丸付けや、行事等での弁当など。ハンカチ、チリガミ、えんぴつを5本そろえる、箸を洗って持たせる、道具をそろえる、音読、丸付け等。1年生の時は親も一緒にやらなくてはだめで、仕事でくたくたになって帰った時は嫌でした。その他に夕食、洗濯、掃除他、気が狂いそうだった。忘れれば忘れてたでお母さんしっかり見てくださいと連絡帳に書かれて、ますます

落ち込みました。」

(北上・母親・30-35歳未満、子3人)

「宿題が多い。フルタイムで働いて学童に迎えに行ってから子が寝るまでの時間内にやらなくてはいけないことが多すぎる。(子も慣れない生活に疲れているので早く寝てしまう)」

(北上、母親、35-40歳未満、子4人)

「仕事から帰宅後の宿題の確認等で時間を使い、その後の食事・入浴・睡眠が遅くなってしまい生活リズムが崩れてしまう。」

(北上、母親、30-35歳未満、子3人)、

保育園・幼稚園まで行われていた毎日決まったものを準備するのとは異なり、小学校では、日によって準備するものは異なる。その際、子の自立を促しつつ、親の対応が求められる。仕事から帰ってきてから、食事の準備、風呂の準備に加え、宿題のチェック、プリント類のチェックなどは、かなりの時間を要するものであり、まさに「時間との闘い」である。対応を怠ることで子供の学校生活、日常生活にも影響がでるため、保護者はかなり神経を使う。

「入学して間もない頃、勉強(宿題)が嫌で泣いていた。」

(大船渡、母親、40-45歳未満、子2人)

「勉強・通学をバックアップするためにすべての生活のタイムスケジュールを変える必要があった。なかなか保育園の時とは違い勉強を見たり提出物をチェックしたりと自分自身がやる事以外にやる事が増えて大変だと思った。」

(北上、母親、35-40歳未満、子1人)

「正直、子との時間はあまりありません。平日帰宅後は宿題をみて直したり指導したりをもっとしたい所ですが、帰宅が7時近くなると、正直、1年生は眠気との戦いです。その中での夕食、お風呂、宿題の直しは簡単なことではありません。3月生まれということもあるかもしれませんが、ちゃんとやってあげたい、でもうまくいかない…それがストレスになることもあります。仕事をパートタイムとかで生活できるのならそ

れがベストだと思いますが、現状難しいので頑張るしかないです。」

(滝沢、母親、35-40歳未満、子2人)

「学校に入ると親の仕事も多くなる気がします。学校のおたよりに目を通すのはもちろん日々の宿題のまるつけ、学校の準備。なかなか共働きだと家事もやり、全て終わるのが夜中になり子となかなか向き合える時間が少なくなりました。」

(北上、母親、40-45歳未満、子2人)

小学校に入ってからの変化は、子にとってもストレスであり、親として、ストレスを感じている子に寄り添ってあげたいと考える。「小1の壁」は、親として、子のストレスに対応するための時間を十分に設けることのできない葛藤としてみられる。

「帰宅後の宿題のマルつけなど一番忙しい時間帯に親の介入事が多く正直つかれます…。夫の理解や育児への介入があっても基本平日はワンオペ育児と変わらない。仕事もし子育てもし家事もする…女性は大変です。」

(滝沢、母親、40-45歳未満、子2人)

「フルタイムのため18時頃帰ってきてから宿題の丸つけ、音読のチェック、手紙のチェック等する事が山積みです。それと同時に夕飯の支度と目がまわります。最近慣れてきましたが、慣れるまで大変でした。習い事も平日のものが多く、私の仕事の都合上送迎が不可能はものが多く、やりたいと言われてもできないものも多々あります。子育て世帯の女性は残業しないという雰囲気ですが、男性の社会はまだ理解はなく、帰宅後はほぼ一人の対応が疲れますね。」

(滝沢、母親、30-35歳未満、子2人)、

本調査の回答者の9割が「母親」である(全回答者における父親の割合は8.8%)。問36に対し、父親が記述したものは12件であり、記述した人数全体の5%にすぎない。子育てを中心的に担うのは「母親」であり、「小1の壁」の対処を余儀なくされるのも、「母親」といえる。

「毎日宿題を出され音読のチェックや丸付けを親がやらないといけない。丸付けも解答がないので問題を読

放課後児童クラブ利用者における「小1の壁」とは何か

んでからやり、答えがあいまいなときもあり、とても時間がかかる時もあり、はっきりいって大変です。

「10年前、兄ちゃんの時は宿題の親の丸付けはなかったです」

(北上、母親、45-50歳未満、子2人)

上記の記述のように、「小1の壁」は、既に小学生の子育てを経験していれば、受け入れられるというものでもなく、第一子との年齢が離れていけば、状況が変化している点も指摘できる。

「未就学児もいるので学校の送り出し、保育園の送迎、それぞれのパターンが違うので朝が大変…など。」

(滝沢、母親、40-45歳未満、子2人)

さらに、保育園・幼稚園、小学校、中学校、高等学校というように、子が複数おり、それぞれの所属先が異なる場合、1日のタイムスケジュールの組み合わせの難しさが指摘できる。また、2でも紹介するが、子の所属先の数に比例し、当然のことながら行事は多くなり、その対応が求められる。

2. 行事への対応

「行事」への対応の難しさについては、25件の記述がみられた。保育園の行事は、利用している保護者の勤務日を意識し、早めにスケジュールが周知される。また、平日以外の開催でも、土曜日などを利用して行われ、利用者の都合を意識した設定となっている。しかしながら、小学校の場合は、学習の一環として様々な行事が設定されているということもあり、平日に行われることが多く、仕事の休暇取得に悩む親の姿がみられる。また、休暇取得ができなかった場合、子の対応に悩む親の姿がある。

「学校行事が平日多く、仕事を休まなくてはならない事が増えた。」

(滝沢、母親、35-40歳未満、子3人)

「学校行事が多すぎる。休みをとるのが申し訳ないと思った。」

(滝沢、母親、35-40歳未満、子1人)

「行事にいつてあげれず、(仕事休めず)さみしい思

いをさせた。時間に余裕がなさすぎてゆっくり一緒にすごしたり話ができない。(聞いてあげれない)」

(滝沢、母親、30-35歳未満、子1人)

こういった状況は、子どもの数が多いとなおさらのようである。特に、子どもたちが全員小学校であれば、同じ日に休暇を取り対応可能だが、下の子が幼稚園や保育園に通っている場合は、行事の数が増え、その対応が求められる。

「今では^{ママ}3保育園行事だけの参加だったため、休暇もそんなに取らなかったですが、学校と保育園行事、どちらも参加するとなると休暇日数が増え、職場に益々迷惑をかけている気がした。」

(大船渡、母親、30-35歳未満、子4人)

「下の子が保育園のため行事がかみあわず休みを多くとったり、休日が子のことで終わりすごく疲れた。」

(北上、母親、30-35歳、子3人)

小学校に入ると同時に、地域の子ども会にも入ることになる。それに加え、学童保育を利用することで、学校、子ども会、学童保育といった3つのスケジュールを把握する必要がある。前述したように、幼稚園や保育園に通っている(中学校や高校も)子がいる場合は、把握しなければならぬスケジュールはさらに増える。

「今までは幼稚園一ヶ所のやりとりでしたが、1年生に上がり、両親が仕事の為学童にもお世話になります。そうすると学校と学童2ヶ所とのやり取りになり、行事や作業がとても増えました。地域の子会などもあり集まりが増え大変です。今はコロナで集まりは減りましたが、これが落ち着き対策等体制が整った後、行事が今まで通りになるのが不安です。休日はゆっくり休みたいな…とってしまいます。」

(北上、母親、30-35歳未満、子2人)

「宿題のサポート、精神的なサポートが労力がかかる。学校の行事、地域の行事、それにともなうの役員も多い。」

(北上、父親、30-35歳未満、子4人)

「学校、学童、子会、地域とそれぞれ行事や活動、役員活動などがあり把握しきれない。手紙類の多さ、「～に取り組みましょう」週間等が多いと感じた。」

(北上、母親、35-40歳未満、子4人)

このような状況の中、同じ小学校に通い、同じ地域の子ども会に参加しているにもかかわらず、行事に対する理解の違いは、共働き世帯とそうではない世帯の、溝を作ってしまう事にもつながる。

「子供会行事が働いている(共働き)人にはかなり無理なスケジュールで強制的にふり分けられる。(7月のラジオ体操当番を7月にお知らせするなど) いろいろ排他的(共働きの人々の時間感じ方?がちがうのか幼稚園のお母さんチームみたいな人たちが仲よしチームになっているのはいいが、何かやるわけではなく(行事など) 結極共働きの家におしつけられるのが不思議。)」

(滝沢、母親、30-35歳未満、子2人)

3. 弁当への対応

小学校に入学後、「弁当」をつくることが多くなり、その負担についての記述は17件あった。保育園には、「長期休み」が存在しない。しかし、小学校には「長期休み」があり、その間、子を学童保育に預けなければならない。「長期休み」や「土曜保育」、また「午前授業」の場合、給食は出ないため、子を学童保育に預ける際は、弁当を作らなければならない。

「保育園は毎日給食だったが、学校が午前授業や休みの日は学童にお弁当を持たせないといけないので、朝の時間が保育園の時より忙しくなる。」

(北上、母親、35-40歳未満、子2人)

「保育所と違い土曜日のお弁当となる。また長期休みもお弁当で、行事の振替日もお弁当とお弁当が必要な機会が増えて大変だった。忘れてしまったこともあった。」

(北上母親、30-35歳未満、子3人)

調査年度は、コロナ禍にあったため、学校閉鎖の間、学童保育に通えはしたものの、弁当作りの回数が増加した。

「夏休み、コロナ休みなど長期の休みの時に学童へ毎日、お弁当をもって行くため、給食がないのが大変だった。」

(大船渡、母親、40-45歳未満、子2人)

保育園でも、遠足の日や弁当の日などが設けられ、弁当を作ることが求められることもあるが、小学校に入ってから「多いような気がする」という記述も見られた。働きながら、弁当を作ることへの負担はかなり重いであろう。

「お弁当の日が保育園よりも多く「またか」と何度か思った。」

(北上、母親、35-40歳未満、子2人)

「年間予定で教えてもらっているが、午前授業でお弁当持参の日が月に1,2回、長期休期間は毎日お弁当なのが大変です。」

(北上、母親、35-40歳未満、子2人)

4. 登校、学童保育開所・閉所時間の兼ね合い

登校に関する記述は21件、学童保育の開所・閉所時間に関する記述は18件あった。

保育園は、子を親が送迎しなければならなかった。朝は、親の手から保育士に子を預け、帰りは保育士から親の手に戻されるというように、子の一日の生活において大人の目が離れるということはない。しかし、小学校では徒歩通学が基本となる。そのため、子の入学当初は、親にとって、登校時の事故がないか、時間通りに学校に行くことができるか、心配はつきない。また、小学校の登校時間は、親の都合よりも、学校の開始時間、集団登校の集合時間といったように、外在的な理由により決まる。保育園までは、親のスケジュールに合わせて、子のスケジュールを組み立てることができたが、外在的に決まる子のスケジュールに合わせて、親のスケジュールを変える必要があり、いろいろと不都合が生じる。

「朝の登校について行きたいが、仕事に間に合わないのについていけず、しばらく毎日心配だった。」

(北上、母親、40-45歳未満、子2人)

放課後児童クラブ利用者における「小1の壁」とは何か

「集団徒歩登校では、嫌だと思つと気持ちのきりかえができないので、1ヶ月は一緒に歩いて通いました。今でも途中まで歩いたり、車で送ったり、毎回戦ってます。」

(北上、母親、40-45歳未満、子3人)

「いきなり登校生活に入るのので、何をしたらいいか子たちはわからず、子たちは保育園、幼稚園気分のままなので、慣らすのに時間がかかる」

(北上、母親、30-35歳未満、子2人)

「子が朝登校しぶりをしても、朝早く仕事に行かなくてはいけない。4~5月は学校→学童に慣れてないこともあり、早めに迎えに行きたい気持ちがあるが、仕事で遅くなることも多かった。」

(滝沢、母親、35-40歳未満、子4人)

「職場のシフト上どうしても早番遅番があるのだが、学校の登校時間よりも出勤時間が早くなり、当番を替わってもらわなくてはならず、職場の人に申し訳なく感じている。」

(北上、母親、40-45歳未満、子2人)

入学当初は(場合によってはそれ以降も)、子の登校に関する悩みは尽きない。対応するにしても仕事に支障が生じることで悩み、対応できない状況もまた悩みをもたらす。

「親が夜勤のある仕事で父親も朝が早目に出勤する仕事なので、土曜日の学童の時間がもう少し早くはじまって欲しいと思った。平日も、学校の開錠が7:30(?)で、7:20ごろに登校して「開くまで1人で待ってた」と言っていたので、子に淋しい思いをさせてしまったと感じている。」

(大船渡、母親、35-40歳未満、子2人)

「学校の開校時間、児童の開門時間が、保育園の開始時間よりも遅いため、仕事に遅れたりすることがある。保育園よりも学童が遠くなり、お迎えが少し遅くなった。延長料がかかるようになった。」

(北上、母親、30-35歳未満、子2人)

「学校での集団登校に毎朝送っていき、その後保育園

組の準備をして送っていくのが大変。」

(大船渡、母親、30-35歳未満、子4人)

保育園と異なり、学校の開門時間と学童保育の開所時間は、親の仕事の都合を意識したものにはなっていない。また、保育園は職場の近くを選ぶことができた(もちろん、希望の保育園に入れない場合も多いが)、小学校は居住地基準となることから、これまでの保育園の送迎時間とは異なる動き(その多くは時間を要することになる)が強いられる。例えば、学童保育の開所時間が、これまでの保育園と同じ時間であっても、職場からの距離の関係上、早く仕事を切り上げる必要が出てくる、もしくは延長すること必至の対応が求められる。

5. 新しい生活への対応

保育園から小学校に上がることで、いわゆる「新しい生活」が、子にも親にも訪れる。このような中で、保育園と小学校の違いに悩む記述が24件あった。

「学校にあがった事で新しい生活となったが、充分に見守ることができているのか…思った以上に家事と育児の両立が難しいのを実感しています。」

(滝沢、母親、40-45歳未満、子3人)

小学校入学は、共働き世帯であっても、そうではない世帯にとっても、子、親共に、新しい生活の始まりではあるが、働いていることで、仕事と育児の両立ということに悩み、そして、そういった状況に十分に対応できていないことに悩む親は多い。子に対する申し訳なさを記述する者も多い。

「保育園の自由な時間と違い、学校は規律ある生活を送るため、きちんとイスに座るコトが苦痛だった。勉強がついていけず「算数がわからないから学校に行きたくない」と言われ悩んだ。」

(大船渡、母親、30-35歳未満、子2人)

「学区内の学校に通わせる事になり保育園が職場の近くで学区外だったので入学してからの友達とのかかわり、今でも気になる点はありますが、子の様子を見ながら通わせているような感じです。」

(大船渡、母親、40-45歳未満、子3人)

上記のように学区とは違う保育園に入っていたことで、子の友人作り、自身の友人作り（学校関係の情報を得るための）に悩む記述がみられる。

「保育園のように先生と顔を合わす機会が少ないので、何かの機会に先生に会った時、学校の様子を聞いて、子から聞く内容と違い、ビックリすることがある。（子は自分に都合のいい、怒られないことを話したりするため）」

（北上、母親、50-55歳未満、子2人）

「保育園にいた時には先生とお会いすることも多く、分からない事や困っている事を雑談の中で話す機会がたくさんあった。しかし、学校にあがると、子は毎日先生と話していたり、適応はしているよう感じているが、親はその分断されている状況に対応しづらかった。どのような教材が必要か、友達とはどのように過ごしているのか、授業中はどのような様子か…など、保育園の時に比べて本当に子の事を知る機会が減った事に親側が不安を感じていた。何か問題が起きたときのみ連絡があるのはとても不安でした。」

（滝沢、母親、30-35歳未満、子3人）

保育園に通っていたときは、送迎の際に、子の状況を保育士から聞かせられ、また、子育ての相談を気軽にできる雰囲気であった。しかし、小学校では担任に会う機会は限られ、毎日の状況が分からないことで、不安は募る。

「昼寝がなくなったことで体が慣れるまで大変そうに思いました。勉強についていくこと、授業時間座っていること、自分のことを自分でしなければいけないこと、友人との関わりなどとても心配していましたが今のところ何とかなっている様子です。大きな生活の変化でストレスがたまってしまうのか家に帰ってからぐずることが多くなりました。」

（滝沢、母親、40-45歳未満、子3人）

「保育園から学校へのギャップがありすぎて学童・学校に行きたがらなかった。」

（滝沢、母親、35-40歳未満、子3人）

新しい生活は子にとっても、親にとっても、慣れる

のに時間がかかり、その状況にゆっくりと寄り添うことができないということが、親の悩みに繋がっている。

6. 学童保育の体制

学童保育に預けているために生じる問題もある。それは既に紹介した、3のような弁当対応と、4に示した学童保育の開所・閉所時間であるが、他にも以下のような記述があった。

「仕事を休んで、学童の保育当番がある。」

（大船渡、母親、40-45歳未満、子3人）

「学童がありとても良いが保護者主体なため仕事が多く強制参加もあるため共働きではきつい面がある。当時妻の勤務先が遠く、下の子のお迎えの時間もあるため冬場の通勤時間が長くなることを踏まえて転職を選択した。転職しなければ毎日子どもたちの迎えが遅くなり、延長時間もオーバーしてしまうこと（追加料金発生と先生方への申し訳なさ）また、子たちの生活サイクルにも影響があるものだった。」

（北上、父親、30-35歳未満、子1人）

学童保育の経営主体が何であるかにもよるが、保護者会などが経営主体となっている場合、保護者のかかわりが多く求められる。そういったかかわりが、親同士の関係性の構築を目的としている場合もあるが、働いている親にとっては負担となる場合もある。

「学校は楽しんでいくのだが、学童が嫌で行きたくないと言った時、学童のプログラムがどうしても上の学年に合わせているため、誕生日会のゲームなどまだ読み書きが出来ていないときに、読んだり、書いたりするゲームがあり、それができなくて一気に嫌になってしまったよう。生活環境が違うため言葉のきつい子もおり、心ない言葉に傷つくこともあるよう。現在は近くの父方の祖父母のところで過ごし学校にも元気に通っている。あまり学童の良さは感じておらず、最初から祖父母にお願いすれば良かったと思った。（祖父母も高齢のため、学童の方が良いのではとされているのもあったが…）」

（北上、母親、35-40歳未満、子2人）

「登校班や学童で上級生との関わりが深くなり上級生

放課後児童クラブ利用者における「小1の壁」とは何か

の悪い場面のまねをして友達にちょっかいを出したりして、入学して半年ほどは落ち着きなく相手の親が介入するほどのトラブルが続き、担任の先生と話し合うことがありました。」

(北上、母親、45-50歳未満、子2人)

「下校後、学童に行くことになるが、学童は1～6年生までの幅広い年齢の子達が利用しており、特に高学年の子から受ける影響力が大きすぎるように思う。(遊び方、言葉のつかい方が乱暴な面も)」

(滝沢、母親、35-40歳未満、子3人)

学童保育のメリットでもありデメリットでもあるのだが、1-6年生までの異年齢が一堂に会するという状況がある。このような状況は、入学によって同年齢の新しい人間関係の構築を求められる1年生に対し、異年齢との人間関係の構築も同時に求められることを意味し、その後の状況にプラスに働く場合もあれば、マイナスに働く場合もあるだろう。親にとっても、上記記述のように、動揺を招くものであろう。

「保育園は去年10月より無償化が始まり経済的にらなくなったが学童に入りまた金銭的に余裕がなくなってきた。まる1日預けているわけじゃないのにもう少し金額が(月謝)が家庭に負担にならないようにして欲しい。」

(滝沢、母親、35-40歳未満、子4人)

「幼稚園は無償化になったのに学童は料金がかかる。夕方まで働いているから一人では置いておけないし、費用が高くて困っている。」

(滝沢、母親、35-40歳未満、子3人)

学童保育の利用料金についての不満もあった。「幼児教育・保育の無償化」が、幼児教育の負担軽減を図るために2019年10月1日より実施されており、原則3歳以上は、利用料金が無償となっている。対象世帯は、2020年度に小学校入学を経験しており、半年ではあるが無償の期間にあたっている。したがって、対象者が、学童保育の利用料について、不満を持つことは想像に難くない。

7. 学童保育のメリット

以上、1から6のように、「小1の壁」が確認されたわけだが、学童保育に預けることで生活が成り立っていることを述べる調査対象者もあり、このようなケースは14件あった。

「就学にあたり、放課後に学童保育がなければ、私達の家庭は成り立たなくなっていたと思います。近くに祖母はおりましたが、入学の前後で入院することになり、みてもらえる人がいなくなったためです。一時とはいえ、主人と悩みました。」

(大船渡、母親、40-45歳、子3人)

「小1になる時に引越しをすると決めていたので、年長さんの頃から引越すことを子に話していました。「お引越しする!」「したくない。お友達と離れたくない。」と気持ちが揺らぐことがあり困りました。入学してからすぐにお友達もでき、今は楽しく学校に通っています。1からお友達作りのため学童に春休みから入れて交流させてよかったです。」

(大船渡、母親、40-45歳、子1人)

「学童があることで、安心して働くことができていますが、コロナなどで学童が閉鎖されると困りました。」

(大船渡、母親、45-50歳未満、子3人)

「問題にぶちあたった時、学校の先生や、学童の先生が、親身に相談にのってくれ、解決することができ、とても助かりました。」

(大船渡、母親、30-35歳未満、子1人)

「保育園と違い(小学校は)、早帰りや休みが多く学童がなければやっていけません。お弁当持参(土曜や長期休暇時など)は大変ですが、とても良い学童なので安心して働けます。預ける=かわいそうというのではなく、学童=楽しいだから子どもは私もとてもありがたいです。地元から離れての子育ては不安でしたが、私は充実してます。」

(大船渡、母親、30-35歳未満、子2人)

「3/31まで保育園に通い、翌4/1から学童に移行しました。慣らし期間もなく移行したので子にとっては負担かなと思いましたが幸いスムーズに移行できました。」

その後も親子とも健康に過ごしているので、仕事への影響もあまりなく、今のところ小1の壁を感じることはほとんどないです。学童は大半の子が4年生になると退所します。(利用人数が多いため。)退所したら親が帰宅するまで子だけで過ごすことになるので、有意義に時間を使えるのか、安全面なども気になります。小4の壁のほうがあるのではないかなと予想します。」
(北上、母親、30-35歳未満、子1人)

以上に示したように、共働き世帯にとって、学童保育があることによって日々の生活が成立している状況が確認される。また、子どもにとっては学校に入る前の友人関係の構築の場として機能しており、親の不安軽減にもつながる点が見て取れる。

V. まとめ

以上、「小1の壁」についての自由記述を分析することにより、学童保育利用者における「小1の壁」とは何かを捉えてきた。結果、宿題等のチェック、行事への対応、弁当への対応、登校、学童保育開所・閉所時間の兼ね合い、新しい生活への対応、学童保育の体制の6点があげられる。

学童保育は、共働きの人たちにとって、子の放課後の居場所がないといった状況を解決するために設けられたものであり、IVの7に示してきたように学童保育の存在によって、問題状況が解決されている人たちもいる。本調査における「小1の壁」の記述が、全体の5割であったことを考えると、調査対象者の半数は学童保育の存在によって、「小1の壁」に対処できているのかもしれない。しかしながら、「小1の壁」を感じる人たちの中には、IVの2、3、4、6のように、学童保育に預けたがゆえに発生している悩みも存在する。冒頭で述べたように、本調査の対象者は、学童保育を利用していることによって、仕事を離職せずに「小1の壁」を乗り越えることができたと考えられる人たちであるが、彼ら／彼女らは、学童保育に預けることで、質の違った「小1の壁」を経験している。

このような状況を考えると、「小1の壁」とは、離職することによって回避できるのではなく、働く親にとっては、質の違うものとしてあらわれてくるものである。それは、「小1の壁」を解決するために設けられた学童保育が、実は「小1の壁」を生じさせる原因となっているという点から指摘できる。共働き世帯が、

以上に示した「小1の壁」を乗り越え、ワーク・ライフ・バランスを実現するためには、学童保育によってもたらされる障壁への対応が必要となるだろう。本調査から言えることとしては、弁当を学童保育にて業者に注文をし、保護者の負担軽減を図る(すでに行われている学童も存在する)、保護者の勤務時間に合わせた開所・閉所時間の検討を行う、利用料についても行政側の支援を検討するなど、多々挙げられるが、おそらく、こういったことは既に検討済みのことであろう。国や地方自治体は、学童保育を利用しているが故に生じる「小1の壁」の内容を理解し、学童保育の経営の在り方と、行政支援の在り方について、今一度検討することが求められ、この点については、本稿で得られた知見を根拠とし、今後の研究課題としたい。

(注)

- 1 学童保育を利用している世帯要件は、ほぼ「就労」であり、地域差はない(全体97.1%、大船渡95.2%、北上97.3%、滝沢97.8%)。学童保育への迎えは、母親が7割ほどで、地域差はない(全体71.0%、大船渡74.6%、北上68.8%、滝沢73.5%)。
- 2 本文に示した通り、『リベラル・アーツ』掲載の研究ノート(庄司・渡部, 2022)が、調査報告書の量的側面についての再分析であるのに対し、本稿は「小1の壁」についての質的側面の再分析となっている。それぞれ同じ問題意識のもとに執筆したものであるため、本稿の記述(問題の所在と調査概要)に関しては、『リベラル・アーツ』掲載の研究ノートと同じ内容の部分があることをこの場を借りて断っておく。
- 3 記述には「今では」と書かれているが、「今までは」だと思われる。本文では、原文のママ記載をした。

(参考文献)

- 厚生労働省 2020 保育所等関連状況とりまとめ
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_13237.html (令和2年4月1日)
- 厚生労働省 2020 令和2年(2020年)放課後児童健全育成事業(放課後児童クラブ)の実施状況
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_15634.html (令和2年(2020年)7月1日現在)
- 内閣府 仕事と生活の調査推進室 2020 仕事と生活の調和レポート2019
- 坂木浩子 2015 保育園を考える親の会「小1の壁」

放課後児童クラブ利用者における「小1の壁」とは何か

に勝つ 実務教育出版 37

庄司知恵子 渡部芳栄 2022 放課後児童クラブ利用者における子育てと仕事の両立について—岩手県大船渡市・北上市・滝沢市の小1保護者の調査から— リベラル・アーツ 16 81-95

高久玲音 2019 小学校一年生の壁と日本の放課後保育 日本労働研究雑誌 707 68-78